

赤い実

池松 孝子

なぜだろう。冬になると赤い実の植物があちこちで目につく。常緑の濃い緑と葉の中につけた赤い実はそのコントラストが堪らなく美しい。紅葉も終わり、花の少ない寂しい冬の庭に赤い実は嬉しい。初夏に白い小さい花を咲かせ、それから秋にかけてその実を育て、寒くなる熟して赤い実になる。

十二月を迎える頃、街を歩くとどこの庭でも赤い実を見る。そんなとき、思わず童心に返り私は歌う。

赤い鳥小鳥、なぜなぜ赤い。赤い実を食べた。

鈴木三重吉の提唱により創刊された大正の童話童謡雑誌「赤い鳥」の歌である。北原白秋作詞、成田為三作曲の「赤い鳥運動」を象徴する歌だ。赤い実を食べたら赤い鳥になる？白い実を食べると白い鳥になる？童謡として片づけるにはちよつと気味が悪いものを感じるのだが。

千両を活けて佳き年願いけり 金子 香ル

秋から冬にかけて赤く熟した千両、万両はお正月に欠かせない縁起物の植物として、すでに江戸時代には園芸種が回っていていたという。古くは「仙蓼」だったが、江戸時代初期に唐橘の別名である「百両」に対抗して、それより勝るとして「千両」にしたともいう。

「両」の名がつけば金運を連想させ、なお縁起がいい。

先日、里山歩きの途中、南大沢の小さな植物園を訪ねた。そこで目にしたのが千両、万両であった。そしてその奥に百両、十両、一両が並んでいた。もちろん、どれも緑の葉に赤い実をつけている。万両は葉の下に花がつき、千両よりたくさん実をつける。千両は花が葉の上の実がつくので、人が上から見たとき見栄えがする。

続いて百両、十両、一両は、その姿は少なからず見劣りがするものだった。同じように緑の葉に小さな赤い実なのだが、実の数が少なくてまばらなものや、葉にとげがあるものもある。また、葉も互生だったり対生だったりで、やはり、切り花にして鑑賞できる千両、鉢植えが楽しい万両が双璧であろう。

後に億両もあると知って、人の欲深さも知った。